

正しい姿勢と呼吸で行う心理療法と被虐待体験をもつクライアント^{1,2)}

— 禅仏教の坐禅と動物行動学, 精神分析理論による問題理解と技法構成 —

西川昌弘* 森川知美** 山田芽衣***

【要 約】

本研究は、(1) 学童期から母親から言葉で虐待されてきた初期成人期女性への心理療法の構築を目標とした。彼女 (A さん) は、情動調節が難しかったので仕事が続かなかった。現在は、デイケアサービスを利用する以外は、家に引きこもっている。(2) 本論では、精神分析理論と動物行動学、禅仏教の教えを概観し、(3) セッション・データの治療過程を同定した。その際、著者の分析方法 (2022) と臨床理論を使った。この治療過程は、次の5つの段階だった。;(4) 第一段階 (#0; "#" は、セッション番号) 筆者の一人である現任セラピストは、最後のスーパーバイザーの場に、引継ぎ者として、筆者の一人である前任者に招かれた。そこでスーパーバイザーと信頼関係のある前任者との意見交換をした。第二段階 (#1~#3) セラピストは、前任者が実現しなかった「セッション冒頭から、A に今、ここでの体験を語ってもらう」ことに取り組んだが、#3では、A さんの在り方を受け止めることに変化した。第三段階 (#4) A さんはセラピストに近い親しみを示した。この作業で、両者の内的次元で、A-セラピスト対象表象一対が体験された。第四段階 (#5) 逐語をデータ化した回。セッション中に、外的/生理的及び内的次元での A さん-セラピスト二者一対、内的次元での現-前セラピスト (森川) 二者一対、内的次元での現-前セラピスト-スーパーバイザー (西川) の三者一対、A-A の肯定的対象表象の二者一対が起動した。A とセラピストは、複数の内的空間を行き来しながら、共に自己検討をおこなった。それは、一つは、セラピスト-A の生理的で心理的な二者一対空間で、もう一つは、心理的な、複数の自己-対象内的表象の二者一対空間の集合空間である。その後のセッションでは、閉塞感が再演されず、そこからの解放が維持された。(5) 結論は、生理的・心理的な二者一対の成立が、複数の心理的な二者一対を導く。この基礎状況を入り口として、私たちは、基本過程である「われ、我ならずして我なり」(上田, 2000) で得られる真の超自我との出会いとその導きに開かれる。これが、否定的な反復強迫から解放された状態である。このような治療機序が仮説として抽出された。自己課題として、社会的自立段階に入った後に、そのような自分が一度死ぬことで、宇宙を構成する「命」に触れること、のスーパーバイザーにとっての重要性が見出された。

1) 大学院心理相談センターでは、訓練生が1年間の期間限定でスーパーバイズド心理療法を実施する。西川以外の筆者の森川は事例の前担当セラピスト、山田は現担当者である。

2) Psychotherapy with correct posture and breathing and the client caught in a double bind. Nishikawa, M., Morikawa, T. and Yamada, M. (authors)

* 本学非常勤講師

** 本学修士課程

*** 本学修士課程

【Abstract】

This study aimed to (1) construct a psychotherapy for a female client in early adulthood who had been verbally abused by her mother for many years. She had difficulty with affect regulation and could not keep a job after graduating from junior college. (2) This paper reviews psychoanalytic theory, ethology, and Zen Buddhism. (3) The case session data were extracted from the treatment process using the authors' analytical method (2022) and clinical theory. It consists of the following five stages. (4) (1st Stage) One of the authors, an in-service therapist (hereafter referred to as "therapist"), was invited by her predecessor as a handover person to the last supervision session. There, she exchanged views with the ex-therapist, with whom she had gained trust with the supervisor. (2nd Stage; #1-#3) The therapist worked on "having the client talk about his/her experience in the here and now from the beginning of the session," which his/her predecessor had not achieved, for several sessions right after the start, and then changed to accepting the client's way of being. (3rd Stage; #4) In the next session, the client expressed a close familiarity with the therapist. In this work, a client-object representation-therapist object representation dyad was formed in the internal dimension of both parties. (4th Stage; #5) This session was converted to date. During the session, several dyads were activated. These were the client-therapist dyad in the external/physiological and internal dimensions, the therapist-ex therapist-dyad and the therapist-ex therapist-the supervisor triplicate in the internal dimension, and the client-positive inner representation dyad. The client and the therapist engaged in self-examination together, moving back and forth between multiple internal spaces. One was the physiological and psychological bi-personal space of therapist-client, and the other was the collective space of psychological bi-personal spaces of multiple self-subject internal representations. In subsequent sessions, the sense of entrapment did not reappear, and liberation from it was maintained. (5) The conclusion is that, with the basic situation that arose in (4) As an entry point, then we were able to open an encounter with the guiding words from the true superego from the basic process.; First, make him-/her-self be physically awake, and aware of "I" existing in the here-and-now and emotional fulfilled. Then, deny "I" existing in the world of the "here and now" actively. This implies "I am not me" followed by this active denial, the openness to the world of the not-me occurs. Then, return to the "I" in the "here and now" again. These three steps can be described simply as awakening physically and being fulfilled emotionally in the here-and-now, which means "me" experiences, and then abandoning this 'me' experiences, and then turning to 'me' (Ueda, 2000), which is a progressive task to break free from the abusive experience. The hypothesis of the therapeutic mechanism was extracted as the achievement of a progressive task to break free from the abusive experience. As a developmental task, "to touch the life composed of the universe after a death of a social self" is found to be important for the supervisor.

キーワード：心身一致、虐待者-犠牲者の二者一対、ダブルバインの克服、調身-調息-調心、本能

key words; mind-body unity, Abuser and alwed dyad, overcoming the double bind, Harmomized posture-breathning-mind, instinct.

1. 問題意識

筆者らは、これまで「日本人の主体性を明らかにする」ために、禅仏教と西田幾多郎の哲学（以下、西田哲学と記す）に焦点を当ててきた（西川と森川，2022 他）。本論では、スーパービジョンの場での対話を軸に、次の展開を得たので、報告したい。

2. 本論文の目標

養育場面で長年、言葉の虐待に晒されてきた後期青年期クライアントへの心理療法の構築を目指す。

3. 方法

精神分析理論と禅仏教の教え等を概観し、それらを踏まえて、事例セッション・データから治療過程の同定を行った。その上で、全体の治療機序仮説を部分的に抽出し、残余部分に関してさらに論じた。

3-1. 認識の方法

本節では、禅仏教の基本概念の幾つかと、動物行動学と精神分析学の本能と睡眠に関する Kubie (1948) の歴史的論文等を概観する。

3-1-1 関連する精神分析学と動物行動学の概念整理

[a] 本能理論

フロイトの定義；「精神と肉体の境界線上にあり、生体の内部から発生し、精神に到達する刺激の心理的代表として、また、身体とのつながりの結果として精神に働くよう要求される尺度となる。」(Freud, S., 1915, p122)

動物行動学の定義；「instinct；ラテン語の instinguere（駆り立てる、扇動する）に由来し、(1) 外部からの適切な刺激がない場合でも複雑な行動を制御する（と推定される）内部システム、(2) 「学習しない」行動を支配する能力に適用されてきた。成人の行動の短期的制御と個人の成長過程における制御システムの発達の両方に関する現代の分析では、(a) すべてではないにしても、ほとんどの行動パターンは常に内的におよび外的決定要因によって共同で制御されており、(b) 一部は遺伝的命令（可能な行動の範囲を制限する）の影響下で、一部は周囲の環境との複雑な相互作用によって発達するというを示すことによって、これらの言葉の使用法を明確にしている。また、(3) 摂食や性行動など、機能的に統一された主要な行動システム、(4) 事前準備のない状態（「本能的にブレーキをかけた」—これまでのところ科学的分析が困難な状態—を表すのにも使われる。」(Tinbergen, N., 1988))

心理臨床理論での本能理論の作業仮説；「1. どのような本能も、本能のパターン全体が先天的な神経網、つまり入力を線形変換する処理単位が網状に存在するとする数理モデルのみ

によって決定されるとは仮定されない。また、先天的な核は、仮定される。2. ある人にははっきりと現れ、他の人には現れにくい生化学的な源、遺伝するが修正可能な神経網、幻想や義務的・恐ろしいパターンからなる複雑な心理的上部構造があり、これらは共に本能的衝動を形成している。(後略) 8. すべての本能的プロセスは、種のための繁殖目的か、あるいは個体のための恒常性維持・自己調整機能のどちらかを果たすことが明らかになる。」(Kubie, 1948)

[b] クライン派の内的表象概念と筆者の立場

上記の本能理論の作業仮説に対応するクライン学派の内的対象概念の定義は、臨床理論上の基点となる。レイは、次のように定義している。「それは心的表象だが。記憶の核であり、他の核から、情動的/感覚的/構造的に区別可能なものであり、また、各々の核の間で、精神内的水準での関係性を有している。私自身、そのような核は、生化学的基質と神経回路網、そして心理的上部構造を伴った構造を持っていると考えている」(Rey, J. H., 1992, p. 443)。筆者も、これらの三軸が、心理療法に持ち込まれる人間の諸問題の位置づけを可能にする座標系を構成すると考える。筆者はまた、禅の世界観のなかに、本座標系はすっきり収まるように思える。つまり、これら3側面のすべてを動かすエネルギー、「命」に関して、禅仏教は、ふつう私たちが使っている「生きている命」と宇宙そのものの「命」があることを教えている。(山川, 2022)

[c] 社会恐怖と超自我

社会恐怖は、呼吸の浅さというような生化学的基質の問題として、また「我思う、故に我あり」だけで、「我、我ならずして、我なり」または「手足を動かして、その後に考える」という神経回路上の問題として、そして、社会集団所属感、集団規範という超自我の問題と、各々仮定される。超自我研究を概観したマイスナーは、「フロイトが親機能の内的代表として超自我を描いたことに始まり」、「内在化された親ないし親的对象は、外在化される。そしてこの外在化物は、親ないしは親的对象の取り入れ物に限られ、この外在化物は、浅薄な次元から深い次元にまでの多様性を持つ」と指摘している。(Meissner, W. W., 1981)

[d] 言葉による虐待；ダブルバインド

ダブルバインド(二重拘束)を主唱したベイトソンの定義は次のとおりである。「1. 二人あるいはそれ以上の人間；このうち一人を犠牲者と呼ぶ。2. 繰り返される経験；我々の仮説が目にするのは、精神的外傷を引き起こす単一の経験ではなく、ダブル・バインドの構造が習慣的な期待となるような、繰り返される経験である。3. 第一次的な禁止命令(a) “何々の事をするな、さもなければあなたを罰する” 或いは (b) “もし何々のことをしなければ、あなたを罰する” 4. より抽象的なレベルで第一次の禁止命令と衝突する第二次的な禁止命令；これも第一次の禁令と同じく生き延びることに対する脅威となる処罰或いは、信号によって補強される」(Bateson, G., 1986, p. 295-329)。本クライアントは、母親から「社会経済的に自立しなさい。ただし、あなたは無能なことを認めなさい」と言われ続けてき

た。子供は、基本的に親を愛し、信頼している。であるが故に、親から、矛盾した二つの命令を繰り返し出される時、子供は、心理的に身動きが取れなくなる。

[e] 反復強迫と閉塞感の問題

虐待する母親の反復強迫と、子供の二次的な反復強迫が存在する。つまり、子供にも、反復強迫的な動的な閉塞感が生まれる。フロイトは、親の在り方が子供の超自我形成の根幹であると述べている。虐待された、ダブルバインドが内在化された子供や元子供は、超自我形成不全に陥っているのである。したがって、健康な超自我体験が、心理療法の一次的課題となる。そして、この健康な超自我体験の基盤と応用が、次に述べる禅仏教の修行の眼目と重なるのである。精神分析からは、先に紹介したキュービーの本能の三次元と、クライン派の内的対象概念が、大きな資源となると思われる。また、Kubie は、反復強迫が引き起こす閉塞感こそが、神経症全般の主たる病因と考えている (Kubie, 1941)。

3-1-2 禅仏教の関連概念

西田哲学と「対話」モデルの主要概念

直感と反省：「直観というのは、主客の未だ分れない、知るものと知られるものとの一つである。現実そのままな、不断進行の意識である。反省というのは、この進行の外に立って、翻ってこれを見た意識である。」(西田幾多郎, 1978, p15)

純粹経験：純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識と其対象とが全く同一して居る。(西田幾多郎, 善の研究, 1968, p. 9)

純粹経験の上田閑照による解説：「西田幾多郎の主著『善の研究』の第一編は反省以前から始まり、第二編は反省から始まり、反省が遂行される。反省以前が心の現象になるのは、反省によってではなく、反省が破られるという方法においてであり、第一編の冒頭で突然直接に純粹経験が提示されるという手法はそれにふさわしいと言える。しかしまた、反省を破るという手法で反省に与えられるものこそ、反省を真に反省せしめるのである。」(上田閑照, 1998, p. 180)

自覚：自己の中に自己を写す(その時の自分と自分の環境を写しとり記述する)ということは、一旦写してそれで終りということではなく、写すことがプラスアルファになっていくということが無限に続けられていく。それが自己写像としての自覚の構造です(上田閑照, 1991, p. 286)。

「対話」：「たとえば「自分を出しすぎる」、あるいは反対に「自分をもっていない」といわれる。前者では自分は捨てるべきものとされ、後者では自分はおつべきもの、自分として確立さるべきものとされている。この言葉づかいに自分というものの本当の姿が映されている。すなわち「自己からの自由」と「自己への自由」が、区別できないほど近くにある状態が真の自己なのである。「自分から出て自分に帰る」がこのように無を通る体験なので、それが観念的空回りか、あるいは自己の生な自由運動かは、具体的に自己でない他者を通していかどうかによる。その限りそれぞれが真に自己であり得るのが「人間と人間」としての

人間存在であり、それが「と」の構造であり、それが「対話」として遂行されるのである。」(上田閑照, 1993, p. 189-190)

3-2. 心理療法の基本技術

筆者の西川は、上記の基本概念に依り基本技術を構成し、大学院附属相談室での8人目の担当者の共著者の山田に示した。1. 坐禅の準備を、対話の準備とする。心身の一致、生理心理を認知する。前任者と異なり、現セラピストは本技術習得が十分ではないが、それを理解した上でデータとして用いた。2. 面接途中で一旦止めて窓を開けて換気する。2-1. 環境を調える。一人になる時間を作る。2-2. 環境に於いて一人になる。3. 相互作用主観性の立場を取り鏡映を重視する (Bohleber, W., 2013, p814) の三点である。

4. データの呈示

4-1. 事例概要

[クライアント]: A (30代半ば, 女性) [主訴]: 「人を罵りそうになる」

問題理解: クライアントは同居の母親から言葉の虐待を受けてきた。

4-2. セッションの過程概要 (以下, クライアントはCl, セラピストは, Thと記す)

【# 5】(挨拶) Th.1 今日、何をお話しましょうか? Cl.2 最近、久々に小説を読んで、数巻あって一巻目を読んでいて、ちょっと落ち着くような気持ちもしつつ、ちょっとイライラする気もして(そうなんですね) Cl.3 はい、で、小説が面白くなるのが、戦争が始まったところかららしいんですけど、まだその辺りを読んでないので、話がまだ面白くないからイライラしている(うん)だから、私は自分の気持ちに鈍いんだなと思って Th.4 (反射) Cl.4 はい、自分の気持ちに敏感になれば、もっと細かいところに気を配れるかなと思う、そのことを考えたい。Th.5 (反射) Cl.5 (はい) Th.6 今のAさんの小説を読む話しは、ちょっとパワフルな感じを受けました。Cl.6 小説読むのは生きがいなのだ。Th.7 小説を読むのが、生きがいなくらい好き(はい) Th.7 好きなことの話しだから、にこやかな雰囲気なのかな。ありがとうございます。Cl.9 【沈黙5秒】(以下【秒】と記す) 読書中は、大体自分の気持ち分かるけど、人に関わる時はよく分からない。Th.11 どのような部分に難しさを感じますか? Cl.11 【1分】自分の中で、こう思わなきゃいけないって思いがあるのかな。(以前カウンセリングをした直後に、着信していたSNSへ

[Thが気づいた事, 感じた事; 体温, 体重の記載なし]

Cl.3では、小説の話は、いつもより明るく感じる

Co.6では、パワフル、上手く表現できない

Co.7では、生きがい!

Cl.9では、ちょっと嬉しそう

C.11では、語調が弱弱しい

の咄嗟の返事で、問われるまま本来は秘密なことまで答えた体験を話す) (Thは冗長な明細化) Th.17 何か今、思っていることはありますか？ Cl.17 【30秒】相手が間違っただけのことをいうことがあるんだから、相手の言ったことが全部良い人の発言だって思わなくて良いと思う。Cl.19 (小学生の時に、母親から不当に貶された場面を話す。課題作文でこれを知った担任男性教師が「お母さんは失礼だ」と言ってくれたエピソードを話す) Th.24 お父さんは何か言葉はかけてくれるのですか？ Cl.24 特に何もありませんね Th.25 自分を受け止めてくれる大人は少なかったのですね。Th.26 そういう経験もあって、自分の気持ちに敏感になれなかったりする。Th.27. 今もお母さんにイラっとしますか？ Cl.27 イラっとします Th.28 伝えられそう？ Cl.28 うーん、伝えてもしょうがないと思います。Th.31 今、Aさんのお気持ちに何かありましたか Cl.31 イライラするって、ちょっと思います 【換気5分】 Th.32 イライラをすっきりさせましょう (Thは窓を開け、自身のストレッチの経験を話す、Clも肩凝りが酷いと。) Th.33 Aさんが肩こりしていると聞いてドキッとした。(Cl 微笑) Th.33 あと15分位です。今、何か思うことは？ Cl.33 (デイケアで、あるスタッフが辞めるのを知ってから、奥で思っていた気持ちに気づいた話。「その人の事を好きになつたりではなかったので、そういうところも…鈍いのかな」。Cl.37 話しに入っていけなくて、一人でポツンとしていると話し掛けてくれたり、前のスタッフは、自分から話さない人がいても、そのままです。その人はそういう人にも積極的に話し掛けていた。Th.39 Aさんはそういう人に好意を抱く？ (多分、そうですね) Th.40 すいません、何か変なこと聞いてしまって。そういう人は好きになる。周りを見る力がある人がいると助かりますね。(Thから、新しいスタッフが来ることは緊張する話) Th.44 メンバーから贈り物とかは？ Cl.45 今日、辞める人にメッセージをデイケアで書いてきました、全体に気を配れる人ですねと。Th.47 (辞める人は) 嬉しいだろうなあ！ 先ほど、別れを知ってから、この人は自分に大事な人だったと気づくことがあったのを思い出しました。Th.48 Aさんがしっかり感じ取っている部分もあると、思いました 【2分】 そろそろ時間です。Cl.49 【30秒】相手が必ず正しいことを言うわけ

Cl.19では、思い出せないと言っていたけれど、まだ考えてくれていた。思い遣りのない母親。担任の反応も気になる

Cl.31では、今、この場では、イライラしていると感じられた。

Cl.35では、少し笑っている、温かい感じ

Cl.37では、辛い

Clは、弱弱しい感じ

Cl.39では、小さく見える

じゃないから、質問にちゃんと答えなくて良いってことを考えて、私は遠慮するところがあるので、それを変えたいと思いました。Th.49 遠慮すると、主導権を取られてしまっている感覚になりました。私なら、とてもモヤモヤする。Th.50 人に合わせられるっていう良い部分もあるけど(はい) (終了)

5. 分析と考察

本節では、心理療法セッションを逐語データ化し、西田理論の対話モデル（西川・森川，2022）を用いて分析する。

5-1. 西田の対話構成概念を用いたデータ・セッションの分析（クライアント展開表現は [Cl]，セラピスト表現は [Th] と記す）

構成概念 「自覚」；自分自身の過去と現在を比較した記述，「反省」；内省の内容が相手の一言で否定され、真の内省に向かう，内省が打ち破られる真の反省

分析結果

Cl.3 「小説が面白くなるのが、戦争が始まったところかららしいですけど、まだその辺りを読んでないので、話がまだ面白くないから、イライラしている」[自覚]

Th.32 「A は肩こりしていないと思っていたのでドキッとした」と伝える。[反省]

Th.40 「すいません、何か変なこと聞いてちゃって（笑）、誰でもそういう人は好きになりますね。[反省]

Th.47 「(そのスタッフは) 嬉しいだろうなあ！ 先ほど、別れを知ってから、この人は自分に大事な人だったと気づくことがあったのを思い出しました」[反省]。

Th.49 「遠慮すると…自分の気持ちや行動の主導権が相手に取られてしまっている感覚になりました。私がそうなったら、とてもモヤモヤする。[反省]

分析の評価 Th に複数の真の反省が生じていた。セッションでの対話の質が基礎的に高いことを傍証している。

5-2. セッションの治療的過程の同定と治療機序仮説の抽出

本セッションの治療的過程 本データから、セッションの治療過程は次のように同定された。(4) (その1) 筆者の一人である現任セラピスト（以下、セラピストと記す）は、最後のスーパービジョンの場に、引継ぎ者として、前任者に招かれた。そこでスーパーバイザーと信頼関係を得ていた前任者との意見交換をした。(その2) セラピストは、前任者が実現しなかった「セッション冒頭から、クライアントに今、ここでの体験を語ってもらう」ことに、開始直後の数セッション取り組み、その後、クライアントの在り方を受け止めることへと変化した。(その4) 次のセッションでは、クライアントはセラピストに近い親しみを示した。この作業で、両者の内的次元で、クライアント対象表象-セラピスト対象表象一対

が形成された。(その5) 第5回目セッション、データ化した回である。セッション中に、外的/生理的及び内的次元でのクライアント-セラピスト二者一対, 内的次元での現-前セラピスト二者一対, 内的次元での現-前セラピスト-スーパーバイザーの三者一対, クライアント-肯定的内的表象の二者一対が起動した。クライアントとセラピストは、複数の内的空間を行き来しながら、共に自己検討をおこなった。それは、一つは、セラピスト-クライアントの生理的で心理的な二者一対空間で、もう一つは、心理的な、複数の自己-対象内的表象の二者一対空間の集合空間である。その後のセッションでは、閉塞感が再演されず、そこからの解放が維持された。

被虐待体験のあるクライアントの治療機序仮説 (1) 正しい姿勢と呼吸、そして今、ここでの体験に集中して「生きようとする」と「で自分と向き合うこと」が起点動因としてはたらく。愛着の能力があるので、内外次元での自己表象と対象表象各々での情報エネルギー交流が生じる。それがより豊かに生きる実感につながり、創造的なポジティブ・フィードバック回路が成立する。(2) 外的/生理的次元での二者一対が複数あり、所与の集団規範が共有されるときに集団ができたという。この集団に所属感をもつときに、自我の機能は向上することが知られている (Scheidlinger, S. 1997)。他方、上記で示される内的表象の自己-対象表象一対の集まりとしての集団での集団規範は、宇宙の一部としての私であり私たちというものである。ゆえに、この集団の集団規範は、現実世界のそれよりも深くまた普遍性を有するので、自己理解を課題に持つクライアントとカウンセラーには所属感を持ちやすい。現実社会での所属集団を持たない人でも、持てる可能性があるものである。そして所属感を持てた時に、やはり自我自律性は高まる。この基礎状況を入り口として、私たちは、基本過程である「われ、我ならずして我なり」(上田, 2000) で得られる真の超自我との出会いとその導きに関われる。これが、否定的な反復強迫から解放された状態である。このような治療機序が仮説として抽出された。

5-3. 超自我の導き手としてのスーパーバイザーの機能について

超自我の導き手とは、超自我それ自体としてののはたらきが主なものではなく、超自我の在り方をセラピストに届ける郵便配達夫の働きを意味する。配達夫に過ぎないものであるが、届ける手紙の内容を、自分自身で実践し、そのやり方と意味を一応、体感しておくことが求められる。以下はその内容である。

精神分析の知見は、その重要性を「内観のプロセスに注意を集中すること、つまり、外界の寄与を最小限に抑え、内界—空想思考の世界—の派生物の出現を促進する一連の条件を作り出すこと」(Arlow 2018, p. 132) に置いている。外の刺激の影響を受けないことを坐禅の坐といい、内なる刺激の影響を受けないことを禅というが、この二つは重なり合うことも多いと思われる。大きな違いは、前者は、「空想思考の出現」を作業対象とする。後者は、調息、吐いて、一拍止まって、吸うことに専念し、記憶や空想思考は基本的に雑念として無視する。そういうお約束の中で、「我、我ならずして、我なり」を生きる。つまり、息を吐くその体験、一拍止まるその体験、そして息を吸う体験を我体験として、「我、我ならずして、我なり」を生きることを一次的課題として、例えば、課題とする公案に関する空想思考

は、二次的価値以下の重要性しか持たない。

私たちは、普通の二者や、集団の場面では、「我、思う、故に我あり」で生きていることがほとんどではないだろうか。しかし、上記の体験を徹底していくと、「我、我ならずして、我なり」を基本態度として、そこに「我、思う、故に我あり」を包含させることができるようになるだろう。

6. 今後の臨床研究—被虐待体験のあるクライアントへの心理療法の到達点

本論ではクライアントにとって一番新鮮な、対人関係の場を扱った。健康な対自、対人体験が主題である。その上で、私たちは 彼らの過去の傷つきの蓄積があるならば、あるだろうが、それを扱わねばならない。それは、前者において「目覚め、眠り、夢、目覚めの間の壊れた連関性が修復され、意味の連続性を修復する」(Arlow 2018, p.132)が目標となる。彼は具体的な手法として、先のスコット (1988) が睡眠と覚醒・入眠の調査に基づいて「私は、まず患者がどのように眠る準備をし、その後、患者がどのように目覚め、その後に行動するのか、そして、起きて寝るまでの間に、患者がどのように眠り夢を見るかを調べる手法を体系的に調べてきたという事実を強調したい。そうすると、驚くほど多くのことが学べるのである。すなわち、それによって、患者の行動や幻想、夢の中の生活について、豊富な情報が明らかになるのである。これこそ卓越した方法である」。筆者は、禅の心身の一致の方法論を一次的課題に据えて、「身体の内平衡、すなわち動的平衡の修復と、意味の連続性の修復は並列的に生じる」と仮定している。この仮説の検証を含めて、すすめていきたい。

【引用文献】

- Arlow, J. A. (2018) Fantasy, Memory, and Reality Testing. *Psychoanalytic Quarterly* 87: 127-148
- Bateson, G. (1986) Steps to an ecology of mind, Harper&Row, 1972, pp 565. (精神の生態学, 佐藤良明他訳, 思索社, pp. 391)
- Freud, S. (1915) Instincts and Their Vicissitudes. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 14: 109-140
- Freud, S. (1921) Group Psychology and the Analysis of the Ego. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* 18: 65-144
- Scheidlinger, S. (1997) The Minyan As A Psychological Support System. *Psychoanalytic Review* 84: 541-552
- Kubie, L. S. (1941) The Repetitive Core of Neurosis. *Psychoanalytic Quarterly* 10: 23-43
- Kubie, Lawrence S. (1948). Instincts and homeostasis. *Psychosomatic Medicine* 10: 15-30
- Meissner, W. W. (1981), *Internalization in Psychoanalysis*, International Universities Press, New York.
- Rey, J. H. (1992). Awake, going to sleep, asleep, dreaming, awaking, awake: comments on W. Clifford M. Scott, *Free Associations*, 3C (3): 439-454
- Scheidlinger, S. (1997) The Minyan As A Psychological Support System. *Psychoanalytic Review* 84: 541-552
- Scott, W. (1988). Repairing broken links between the unconscious, sleep and instinct: and the

- conscious, waking and instinct, *Free Associations*, 1M (12): 84-91
- Tinbergen, N. (1977) *Instinct*, p. 313. (In *Fontana Dictionary of Modern Thought*, Alan Bullock, A. & Trombley, S. (eds), Harper Collins Distribution Services).
- 西田幾多郎 (1968) 善の研究, 西田幾多郎全集, 第一巻, 東京, 岩波書店, pp. 457
- 西田幾多郎 (1978) 自覚に於ける直感と自覚, 西田幾多郎全集, 第二巻, 東京, 岩波書店, pp. 396.
- 西川昌弘, 森川知美 (2022) ただ迷うことと準備を調べて自分と向き合うこと, 神奈川大学心理相談センター紀要, (11), 51-63
- 上田閑照. (1991) 西田幾多郎を読む, (p. 282-287), 岩波セミナーブックス 38, 東京, 岩波書店, pp. 413
- 上田閑照. (1993) 禅仏教 根源の人間, 同時代ライブラリー 142, 東京, 岩波書店, pp. 364
- 上田閑照. (1998) 西田哲学への導き 経験と自覚, (p. 180), 同時代ライブラリー 339, 東京, 岩波書店, pp. 281
- 上田閑照 (2000) 私とは何か, 岩波新書
- 山川宗玄 (2020) personal communication

【参考文献】

- 鈴木大拙. (1949) 中国古代哲学史, 新潮社, 東京, pp. 228
- 鈴木大拙. (1972) 日本の靈性, 岩波書店, 東京, pp. 282
- Tinbergen, N. (1969). *The study of Instinct*, Clarendon Press Oxford, UK, pp. 228